

新英米文学評伝叢書

EMERSON

東京大学教授

齋 藤 光

東京 研 究 社 發 行

新英米文学評伝叢書

R. W.
EMERSON

斎 藤 光

1966

東京 研 究 社 出 版

エマソン

¥350.



KENKYUSHA

新矢木又子

評伝双書

昭和 32 年 5 月 1 日 印 刷

昭和 32 年 5 月 5 日 初版発行

昭和 41 年 7 月 15 日 再版発行

著 者 斎 藤 光

発 行 者 小 酒 井 益 藏
東京都新宿区神楽坂 1 の 2

印 刷 所 研究社印刷株式会社
東京都新宿区神楽坂 1 の 2

発 行 所 研究社出版株式会社

東京都新宿区神楽坂 1 の 2
振替口座東京 83761 番

目次

はしがき	一	iii
一、家系と少年時代	一	
二、灰色の青春	一三	
i. ハーヴァード大学生	一三	
ii. 女学校教師	二〇	
三、教会	三〇	
i. 神学生	三〇	
ii. 牧師	四一	
四、ヨーロッパ旅行	五七	

五、『自然論』	六七
六、『アメリカの学者』と「神学部講演」	八九
七、『ダイアル』とブルツク・ファーム	一〇九
八、悪の問題と報償	一二四
九、詩と批評	一三九
i. 美学	一四一
ii. 批評	一五七
iii. 詩	一六三
十、『代表的偉人論』其他	一七九
年表	卷末
参考書目	1
索引	14

圖版

[illegible]

一、家系と少年時代

エマソンを中心とするトランセンデンタリストの間にはユニテリアン牧師が多い。ただこれだけの事実から、エマソン達の思想に宗教的な臭味を感じることができる。エマソン自身一八三二年に教会を辞したとはいえ、ボストン一流のユニテリアン教会の牧師を三年あまりも勤めたし、最初からトランセンデンタリストとしてエマソンのグループの代表者であったジョージ・リプリー (George Ripley) もセオドア・パーカー (Theodore Parker) もユニテリアン牧師であった。元来ユニテリアン派は、十七世紀以来の正統的ピューリタンであったコングリゲーショナル派から十八世紀末葉に分離したものであって、教義的にこそカルヴィン主義をすてはしたが、その道德や生活感情といった面では、昔ながらのピューリタンの伝統を保持していた。

ラーフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) は数代にわたってこのコングリーショナル派の牧師をしていた家に生れた。そしてアメリカにおけるエマソン家六代目にあたる父ウィリアムはユニテリアンの牧師であった。この家系のなかに流れてきたピューリタンの血をラーフ・ウォルドーも受けついで。エマソンを理解する上にピューリタンの伝統は重要な鍵となる。エマソンはプラトン、スウェーデンボルグ、ゲーテ、コウクリッジ、カーライル等を初め、印度、ペルシャ、シナの思想から影響を受けたことは事実であるが、これらの思想の種子がニュー・イングランド的な、すなわちピューリタンの土壌に播かれたことを見逃すわけにはゆかない。エマソンの少年時代を知ることとは、とりもなおさずニュー・イングランド精神にふれることになるのだが、その前に、ニュー・イングランド宗教史の縮図ともいふべきエマソン家の家系にさかのぼってみたい。

アメリカにおける初代のエマソンはトマスというパン屋であった。二代目はジョウゼフという牧師。彼は晩年コンコードに移ったため、二代目以来エマソン家はコンコードと関係をもつこととなった。このジョウゼフの妻はコンコード初代の牧師ピーター・バルクリー

(Bulkeley)のあとをついだ牧師エドワード・バルクリーの娘であつた。このピーター・バルクリーはピューリタン神政政治の殿將コトン・マザーの名著『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』(Magnalia Christi Americana)のなかに、その略伝が記されているほどの人物であつたが、彼の曾孫エドワード、すなわち三代目のエマソンは牧師にならずに商人になつた。しかし四代目ジョウゼフから五代目ウィリアム、六代目ウィリアムと牧師がつづいた。エマソン家三代目の時代、すなわち十八世紀初めは、新世界の一角に聖書に基礎をおく神の国をうちたてようとの初代ピューリタンの烈しいカルヴィン主義的信仰が、次第に衰えをみせていた時であつた。サミュエル・スーアル (Sevall) の晩年の日記が物語るような、ピューリタン精神の世俗化が生じてきた。

この衰微に拍車をかけたものはアルミニウス派と称する反カルヴィン的な自由神学や、理神論であつた。これは丁度エマソン家四代目、すなわちジョウゼフ牧師の時代に生じた事件である。この時に、信仰の沈滞を挽回しようといつとめ、またカルヴィン主義の牙城を内側から崩壊させてゆくに思われた自由神学とたたかつたのが、アメリカ有数の神学者ジョナサ

ン・エドワーズであった。

彼はニュー・イングランドにおける「大いなる覚醒」(The Great Awakening)と称せられる一七四〇年代の信仰復興運動の中心人物であった。そして彼を援け、この運動を促進したのは英国から伝道に來た雄弁家ジョージ・ホイットフィールド(Whitefield)であった。エドワーズの場合には理知と感情が調和を保っていたが、ホイットフィールドにおいては感情が優位をしめていた。二人の間には教義的にも、伝道の方法にも明らかな相違がみられたが、信仰復興のためには互に協力をおしなかった。四代目のジョウゼフ・エマソンもエドワーズと大體似たような立場でホイットフィールドに協力した。ジョウゼフのみならず、彼の妻の父サミュエル・ムーディ、またラーフ・ウオルドーの祖母の父ダニエル・ブリス(コンコードの牧師)たちも、ホイットフィールドの運動に協力した。(「エマソン全集」十一巻収
録「コンコード史」参照)

五代目ウィリアム・エマソン牧師の時代はアメリカの独立革命の時にあたり、監督派すなわち英国教会派の牧師を別として、ニュー・イングランドの他派の牧師たちは、自由のために闘い、説教壇上からも革命を支持した。コンコードの牧師ウィリアム・エマソンは熱烈

な愛国者であった。六代目のウィリアム・エマソン、ラーフ・ウォルドーの父の時代は、コングリゲーション派のなかにユニテリアン一派が形成されていた時代で、キリストの神性を否定する反カルヴィン主義の自由神学が流行した。ウィリアム・エマソンはボストンの第一教会というアメリカにおけるユニテリアン派の始祖ともいべきチャールズ・チョーンスイ (Charles Chauncy) が牧した教会の牧師となり、当時の重要な文芸雑誌『月刊文集』(“The Monthly Anthology: or, Magazine of Polite Literature”, 1803-11. 詩人ブライアントも編集に参加。のちに『北米評論』にひきつがれた) を編集したりして、宗教的文化的に多彩な活動が約束されていたが、一八一一年、ラーフ・ウォルドーの八歳の時に、五人の男児をのこして病歿した。

ユニテリアン派を独立した教派として確立させたのはウィリアム・エラリー・チャニングであって、彼の一八一九年のいわゆる「ポールティモア説教」が、独立宣言の役を果たしたのであった。これはラーフ・ウォルドーが神について宗教について思索する年頃に達した時の、ボストン宗教界の情勢を象徴する事件であった。エドワーズ以後コングリゲーション派

は、一方において、理知を重んじ教義的にはカルヴィン主義を否定する人間主義的な自由神学を標榜するユニテリアン派と、他方においては、昔ながらのカルヴィン主義を受けつぎながらも、理性より感情に重きをおく一派とにわかれた。エマソンの父の代には前者が新しい時代精神に合致し、知識階級にも、また新興のボストン実業家の間にも、人気を博するようになった。

このユニテリアンの信仰を受けついだエマソンは、ユニテリアン神学者の多いハーヴァードの神学校に学びユニテリアン牧師となったのだが、理性に傾いたユニテリアンを再び心情の側にひきもどし、ユニテリアンのなかからトランセンデンタリズムを生み出したのであった。ただその際エマソンはユニテリアンたちとともにカルヴィン主義を完全に否定していたのであるから、彼より丁度一世紀前に生れたジョナサン・エドワーズとは教義的にあい入れない立場に立っていた。しかしこの両者には多くの共通したものがある。その一つはエドワーズがカルヴィン主義の立場から宗教を心情の問題としたのに対し、エマソンは反カルヴィン主義から、そしてユニテリアンよりもっと自由な立場から、宗教を心情（エマソンの場

合は直観であるが）の問題とした点である。

エマソン家の直系からも四人の牧師を出しており、ラーフ・ウォルドーと何らかの血のつながりを持つ祖先には何十人という牧師が出ている。この事實はただピューリタンの敬神と道徳をエマソンに伝えているだけではない。牧師がアメリカ植民地時代の文化の担い手であったことを考えれば、エマソンの家系に信仰と道徳のみでなく、広く学芸への愛の伝統が流れていたことは当然であった。一代目トマスは別として、彼の直系の子孫は何れもハーヴァードの卒業生であった事実も、このことを明らかにしてくれる。

エマソンの母ルース（Ruth）の父ジョン・ハスキンスはボストンの裕福な醸酒商であった。若い時に家を飛び出て水夫となり、のちに私掠船の乗組員になり、スペインやフランスに捕えられたこともある。このように血の気の多い人であったが、ニュー・イングランドのヤンキーらしくボストンのトリニティ教会（英国国教会派）の熱心な信者であった。ルースの母も夫に劣らず気性の烈しい女で、夫の教会には断乎として出席せず、娘時代から通っていたコングリゲーションナルの教会に子供を引き具して通った。ルースは両親の強い性格は受けつ

がなかったが、厚い信仰を持ち、級友のメアリ・ムーディ・エマソンが兄ウィリアムに「美德の権化のような人」と言つて、結婚をすすめたほど敬虔で善良であつた。エマソンが母方の祖父母の血から何をえたかは指摘できないとしても、彼の思想の一面であるヤンキー的行動への意欲には、多少ともハスキンス家の血が關係しているにちがいない。

エマソンの家系は誇るにたる輝しいものであつた。叔母メアリも愛する甥たちに、そのことをさとし教えていた。しかし青年エマソンは家系を誇るといつた氣持を輕蔑していた。彼の目はアメリカの過去をみず、前方にそそがれていた。エマソンは少年時代から非常な読書家であつたが、十七、八世紀のピューリタンの書物はあまり読まなかつた。コトン・マザーの『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』は開いたらしいが、父の蔵書の一つであつたエドワーズの『自由意志論』すら読んだ形跡がない。コングリゲーションナルからユニテリアンへという宗教上の變動期は、同時にアメリカが独立国家として繁榮する發展の時であり、ボストンのピューリタンの後裔たちですら物質主義商業主義の空氣に染つていた。ピューリ

タン精神が、その発祥の地であるボストンにおいて、ヤンキー精神に変貌しようとする時期であった。

エマソンの父ウィリアムは大教会の牧師として、世俗的な名誉と成功を獲得したが、既に述べたように、三男ラーフ・ウォルドーが八歳の時に病死した。幸い教会の委員達の同情があり、当分牧師のサラリーが遺族に払われ、まもなく年五百弗を七年間遺族におくることがきまった。しかも牧師館に向う一年間住むことも許された。しかしエマソンの母は六人の子供をかかえているため、生活をきりつめ、下宿人において生計のたしとした。

父親のいないエマソン家の精神的支柱はラーフ・ウォルドーの叔母メアリ・ムーディ・エマソンであった。彼女は兄ウィリアム牧師とちがい、カルヴィニストであったが、兄におとらず哲学と文学を愛し、甥達の大成を夢みながら、その教育に心をそそいだ。ラーフ・ウォルドーも心からこの叔母を愛し、尊敬していた。やっと十歳くらいになった彼と叔母との間に書翰の往復が始まった。彼が一八一三年に書いた手紙は、十歳の子供のものとも思えない

ほど大人びた内容であるが、これも子供らしく友人と遊び暮すことのできない貧しい、そして厳格な生活のためであらう。「朝には普通六時五分前に起きます。それから〔兄〕ウィリアムと一緒に火をおこし、そのあとでお祈りの時のテーブルを並べます。六時十五分くらいにママをおこします。……学校から帰ってきて、もしママの用事があれば、それをし、それから朝食の用意に薪を運びます。それから少し遊んで御飯になります。それから讃美歌を歌ったり、聖書を読んだりし、そのあとで叔母さんがいた時にしたように、ロリンを読みます。寝る時はみなまちまちです。僕は八時ちょっとすぎにねるのですが、一人で御祈をしてから目をとじます。これで一日の苦勞トイラがおわります。」(ラスク「エマソン」
伝「三六、七頁」)

この叔母が一八六三年に死ぬまで、二人の間には手紙の往復が続いたが、その大部分は一八三三年頃までである。このことは彼が少青年時代を通じ、この叔母から懇切な指導と大きな感化を受けたことを物語るものである。またエマソンの『ジャーナルズ』「ジャーナルズ」「日記」十巻を繙くものは、彼がこの叔母についてくり返し語っているのに気づくであらう。トランセンデンタリストのエイモス・ブロンソン・オールcott (Amos Bronson Alcott) とソロー、それにカーライル、

この三人の名前とならんでこの叔母の名前が一番多く記されているほどである。処女作『自然論』の完成もまじかな頃、エマソンは叔母のことを「若き日のわが聖哲^{オウクル}」と称した。(三八
年六月の『日記』)

この叔母が死んで数年のちに、エマソンはボストンの婦人クラブで叔母についての講演をしている。それによると、このカルヴァイン主義者で大の読書家の叔母は、一種の奇人であつて、いわゆる優しい叔母さんではない。エマソン兄弟の才を愛し、きびしく、權威をもつて、彼らを教育した。彼らのために信仰にあふれた祈りを書き、これを毎日読ませるといった宗教教育をしてくれたが(一八三七年五月の『日記』)、一方「些細なことを軽蔑し、高い目的をかがげよ。怖ろしくてできないと思うことを為せ。崇高な人格は必らず崇高な動機から生れる。」(『メア
「デイ・エマソン」全集』十巻収録)といった教訓をくりかえし少年達の頭にたたきこんだ。彼女が書いてくれた祈りほど、エマソンがのちに牧師となり、説教の準備をした時の励しとなったものではなく(一八三七年五月の『日記』)、また彼女の教訓に後年のエマソンの自恃の精神に通ずるものがあるのは、決して偶然ではない。六十六歳のエマソンは少青年時代をふりかえり、この叔母の教育が